

## コラム

## 祭なき祝祭としての現在

戦略・産業ユニット 原子力グループ 松尾 雄司

災害の影響というものは思わぬところに現れるもので、今回の震災も各方面のさまざまな人に予期されない余波を与えたものと思われるが、私の場合それはパスポートの喪失だった。4月初旬のその日、午前11時45分の便で英国に行く準備をし、偶々前日遅くまで作業していた私は当日の朝6時になってようやく荷造りを始め、それが概ね終わった頃になって初めて、いつも置かれているはずの机の引出しの中にパスポートがないことを発見した。固より私の場合、何かをどこかに置いた積りでいながら実は全く別の場所にしまっているということはよくあることなので、当初はあまり深刻に考えず他の引出しや鞆の中を探してみたが、見つからない。そこで普通それがあるとは思われない書棚の中や、洗濯物や洋服箆笥の中を見てみたがやはり見つからない。そう広くもない単身世帯の部屋でこれだけ探して見つからないということは、もしかしたら私は本当にそれをなくしてしまったのかも知れない。私が考えたのは二つの可能性だった。これから部屋を隈なく探したとして、もうこれから成田に行って予定通り飛行機に乗ることは不可能であろう。この場合、次の日の同じ便で英国に向い（もし空席があれば）、一日遅れで会議に出席することになる。幸い会議自体は到着した次の日の夕刻から始まる予定となっていたため、一日遅れた場合にも私の遅刻は2時間程度で済むものとなるだろうが、会議前に内輪で行うはずだったプレ・セッションでの発表については同行する先輩のS氏にお願いしなくてはならない。もう一つの可能性は、本当に私がパスポートをうっかりごみと一緒に「捨てて」しまったのではないかということだった。（3週間ほど前に部屋の中でパスポートを見た記憶はあるので、どこか道端などに落としたことは考えられない。）この場合、パスポートの再取得までの時日を考えると今回の英国の会議は全て欠席することとなり、本会議での発表も全てS氏にお願いすることになる。このように考えた私はとりあえずS氏にその旨の連絡をし、今ごろはパスポート喪失の懸念などとは無縁に元気に成田に向っているであろう彼を心の底で羨みながら、上記のうち最低でも前者の解決となることを願いつつ既に引出しの散乱した部屋の中で、まず一息をついてみることにした。

結果をいうと最初に述べた通り、これは震災の余波であった。つまり3月11日の東日本大震災のときに私の机が数センチメートルほど右にずれ、その隙間に昔家族からもらったぬいぐるみと一緒に、パスポートが落ちていたのだった。思いがけない幸運によりそれを発見した私が散乱した荷物を再度まとめ、慌てて外に出てタクシーを拾ったのはちょうど午前10時頃だった。私の住む墨田区から成田空港まで車で何時間くらいかかるのだろうか？という懸念から道中、運転手に何度も着くまでの時間を確認してみたが、結局私は高速道路を使って1時間もかからずに無事成田空港に到着し、S氏よりも早く飛行機の搭乗口に到達することになった。かかったタクシー代は2万800円程度で、そのため私は後日それを

交通費として研究所に請求するかどうかの選択に迫られることになったが、結局交通費としては通常の電車賃のみを請求し、従って結局この件では震災により個人的に2万円弱の負担を強いられることになった。

パスポート喪失のもう一つの影響は、慌てて荷造りをする際に飛行機の中で読む積りだった書籍を鞆の中に入れ忘れたことだった。そのため私は空港内の書店で何か読むものはないかと探してみたが、大体このような店にあるものは旅行のガイドブックか、雑誌か、ビジネスマン向けの啓発書のようなものが多く、私が読めそうなものはあまりない。その中で書棚を見ているうちに私は中公新書の木村敏「時間と自己」を発見し（なぜ一冊だけこのような本があったのかはよくわからない）、昔から名前だけは知っていたものの一度も読んだことのなかったこの著者の本を、11時間の飛行機の中で読んでみることにした。



木村敏は臨床医学での知見をベースに「臨床哲学」と称する分野において独自の議論を展開したことで広く知られる精神医学者である。本書「時間と自己」において彼はまず、我々の問いと我々の世界を「もの」と「こと」とに分類する。「もの」とは文字通り世界の中に存在するさまざまな「もの」即ち対象化された事物のことであるが、それは必しも物質的なものに限らない。世界には鉛筆という「もの」があるのと同様に、例えば二次方程式という「もの」も存在するし、得体の知れない不安という「もの」も存在する。それに対して「こと」とはさまざまなものが構成する事態のことであり、例えば我々の世界では私が鉛筆を持っているという「こと」や $x^2=4$ の解が $x=\pm 2$ であるという「こと」、私が常に不安に駆られている、もしくは私は常に幸福であるという「こと」が成り立っている。

そして我々の精神は純粋な「こと」の不安定さに耐えることが難しい、と木村は言う。例えば何かが速く動いている、という「こと」を認識した我々は、次の段階ではすぐに「速さ」という「もの」の概念を形成する。というよりはむしろ、我々の認識がもつ純粋な「こと」の世界は、常に直ちに「もの」の概念によって汚染されるのだ、という。そしてこのような言い方から容易に予想がつくように、木村はこの本の主題である「時間」と「自己」について、それらは本質的にただの「もの」、つまり計測された「時間」や対象化された「私」ではなく、どこまでも非対象的な「こと」としての様相をもつものである、と言う。このような言い方が西田哲学でいう「場所」、つまりどこまでも述語となって主語とならない、対象化されない「私」というものに関する思想に影響を受けていることは明らかだが、私はむしろこれは西田の思想を模倣した上で論理的に劣化させた、悪しく形而上的な思想に過ぎない、と感じる。（木村の用語法に従えば我々が「時間」と言った時点でそれはどこまでも「時間という<もの>」なのであり、そこで「時間という<こと>」について語ろうとするのは当初の文法を逸脱したナンセンスな行為であると私は思う。）しかしそれはそれとして、本書の特色はその「こととしての時間」を、精神病理学的観点から説明している

点にある。

ここでまず対比されるのは、分裂病者と鬱病者である。分裂病とは通常青年期に発症する、自己性の不確かさを示す精神症状であるが、木村によれば分裂病者は「いつも未来を先取りしながら、現在よりも一歩先を生きようとしている」、つまり未知なるものとしての「未来」に対して常に恐怖と憧憬を有している状態にある、という。そして一方で彼は今まであり続けてきた自己の積み重ねとしての現在を、つまり既存のものとしての事実性を自己の根拠として引き受けることができないために、「自己が確実な自己性を有していない」、私が私でないと感じられる状況に立ち至るのだという。そして木村はこの分裂病者の時間意識を、アンテ・フェストウム（「祭りの前」）的、即ち未来先取的な意識と呼ぶ。

一方で鬱病とは、中年期以降に発症する、社会的な生活の中での抑鬱気分や抑止症状、焦燥感、不安感といった症状のことである。鬱病者は分裂病者とは逆に「既存の住み慣れた秩序を愛好する」人々であり、そのような人が現在の奥深くに蓄積されたものとして大切に持っている過去の所有が、転勤、定年退職、家族の死等の生活秩序の変化により一気に喪失され、社会的な役割としての自己同一性が失われたときに、彼らは鬱病に陥るのだという。このため鬱病者は「とりかえしのつかないことになった」「済まないことをしてしまった」という後悔の形として、巨大な未済の過去を蓄積として持っているのだという。そしてこのような時間的意識を、木村はポスト・フェストウム（「祭りの後」）的な意識、もしくは「あとの祭り」的な意識と呼ぶ。

ここで注意すべきは、これらのアンテ・フェストウムの、もしくはポスト・フェストウムの意識は精神病患者という「異常」な人々のみに対して当てはまるものではなく、健全な人を含む多くの人が多かれ少なかれこのような意識構造を持っている、とされる点である。木村によれば「分裂病親和的」な人々は数学者や理論物理学者、哲学者、詩人、革命理論家などに多く、実用的な科学の研究者、実務的な才能のある人、実業家や保守的な政治家などには少ない、という。そして実際に分裂病が発病するのはこの分裂症親和的な人々のうち、最も極端な場合であるに過ぎない、という。実際の物理学者や哲学者がどうかはともかくとして、もしこの木村の主張が正しいのなら、全く同様に恐らくは人の属する「組織」についても、分裂症親和的な傾向をもつものと鬱病親和的な傾向をもつものがある、とも言えるのだろう。その意味で、広く人間の精神活動一般がもつ時間的意識の類型として、ここではアンテ・フェストウム及びポスト・フェストウムという区分が論じられている、と見ることができるだろう。



この辺りまで「時間と自己」を読んだところで私は飛行機を降り、他の日本人の参加者と合流して空港からタクシーに乗って、会議の開催されるロンドン郊外のハートウェルへと向った。

今回の出張の目的は、昨年5月にハートウェル・ペーパーと呼ばれる温暖化政策に関する論文をまとめたロンドン大学経済学部 (London School of Economics) のプリンズ教授らのグループと討議を行うことであった。ハートウェル・ペーパーについてはLSEのサイトからダウンロードできる (日本語訳もある) のでご覧いただきたいが、その主要な趣旨は2009年の第15回気候変動枠組条約締約国会議 (COP15: コペンハーゲン) の結果を受け、UNFCCC及び京都メカニズムの枠組みによる気候変動政策の有効性を否定し、それに対して「逆転」したアプローチを提唱するところにある。

彼らの論ずるところによれば、現在の気候変動の問題は過去の類似の問題 (オゾン層破壊や硫黄による公害の問題) とは異なり、複雑で十分に理解されていない開放系にかかわる非常に厄介 (wicked) な問題である。それは人口問題、技術の問題、貧富の格差の問題、資源利用の問題などさまざまな問題を包含した大きな複合的な状態の一面であるに過ぎず、それを一義的に、完全に解決する方法は存在しない。従って脱炭素化・温室効果ガス排出削減は意図的な最終目標とはなり得ず、それに付随した問題の解決を伴うさまざまな目標の達成を経由して間接的に達成されるべきものである、と言える。従って我々は排出量削減という直接的な目標に直ちに向うのではなく、まずは広範な賛同が得られ、最少のコストで早期に結果を出せるような対策から始めるべきなのだ、とハートウェル・ペーパーの著者たちは主張する。

このような主張を読んだときに若干の混乱とともに我々がまず感じるのは、結局のところ彼らは何を言いたいのか? ということであろう。彼らの趣旨は京都議定書方式の、〇〇年までにこの国は〇〇パーセントの温室効果ガス排出量を削減する、という直接的・一義的な削減目標による方法を否定することにある。では彼らは、そのようにある年までに一定の温室効果ガス削減をしなくとも地球環境問題を解決できる、と言うのか。もしくはそもそも、地球環境問題のために温室効果ガスを削減する必要などはない、と言うのか。そうではない。では彼らが何を言ったところで、ある年までに一定以上の削減を行うことが結局必要であることに変わりはないのではないのか。少なくとも2020年までの排出量削減を各国が設定し、それに向けて各国が努力を行うことは、即ち京都メカニズム的なアプローチは結局のところ必要かつ有効な手段なのではないか? 彼らは一体何が言いたいのか。

ハートウェル・ペーパーには具体的に、研究開発のための特別目的税として炭素税を設定し、それにより政府が断固として決意をもってクリーンエネルギーの普及に努めるべきだ、というような政策への提言も見られる。しかしそのような具体的な記述は全体のごく一部に過ぎず、紙数の多くはより抽象的な、観念的な議論に費やされている。その少数の具体的な提言 (目的税としての炭素税と、セクター・アプローチ的な手法。これら自体は既にこれまで言い古されてきたことであり、議論の分かれる点ではあっても彼らのオリジナルな論点ではない) 以外に、一体彼らが何を主張しているのかがわかりにくいために、このハートウェル・ペーパーを読んだ人は最初の印象として、何かの物足りなさを感じることになる。

広く認識されているように、現在、様々な立場から地球環境問題を論じる人々の間には大きく二つの傾向を見て取ることができる。一つは2020年、もしくは2050年といった将来のある時点における温室効果ガスの排出量削減を数値としてできるだけ大きく（「野心的に」）設定し、それに向けて再生可能エネルギーの導入等種々の対策を積極的に進めるべき、と主張する立場であり、ここでは仮にそれを「環境派」の立場と呼ぶことができるだろう。もう一つは過去の排出量の歴史的推移と技術の進展見通しを考慮に入れ、世界各国の持続的な経済成長を維持しつつ対策を進めた場合には将来の排出削減には自ずから限界点がある、と主張する立場であり、それを仮に「経済派」の立場と呼ぶことができる。環境問題を論じる人は他人の意見をその何れかに分類して理解するのが一般的であり、更には自分がそのどちらの立場に立って発言をしているかをも、暗黙のうちに認識していることが多い。

ここで我々がすぐに気がつくことは、この前者の立場は木村敏のいうアンテ・フェストゥムの・分裂病的傾向を明確に示すものであり、一方で後者の立場はポスト・フェストゥムの・鬱病的傾向を示すものである、ということである。つまり環境派の主張は常に年代を先取りして2020年、30年、50年、100年の数値目標を高く設定し、反して時として現在の我々の状況や、過去の推移からどのような未来が予想されるかということ省みない。他方経済派の主張はまず過去と現在の状況に重点を置き、その延長としての未来からのみ今後の目標を定めようとする。そのため地球温暖化の議論にあっては、大抵の場合環境派の提示する温室効果ガス削減目標は、経済派の出すそれよりも削減量が大きなものとなる。これは木村敏の言うように人の性向（この場合、「組織」の性向を含む）を大きく二分する特質を示すものであり、この互いに容れ難い両者の相克のもとに常に地球環境問題への対処は進行するものと言って良いだろう。

では、このような中でハートウェル・ペーパーの著者たち（Hartwellites たち）はどちらの立場に立つものだろうか。一見すると彼らの立場は典型的なポスト・フェストゥムの傾向を示すものであるように見える。実際彼らは将来の野心的な排出量削減目標を定める京都議定書方式の方法を否定し、「人間の尊厳」のもとに持続的な経済成長と気候変動問題への対応策とを両立させることを強く主張する。再生可能エネルギーのみではなく原子力をも積極利用した上で現実的に達成可能な道筋を描くことを主張し、しばしば「環境派」の目標に見られる過大な再生可能エネルギーへの期待を批判する（気候変動の議論においてなぜアンテ・フェストゥムの傾向が再生可能エネルギーと、ポスト・フェストゥムの傾向が原子力と親和性が高いのかは私にはよくわからない。もしかしたらそれは原子力という夢を未来に投影する人がもはやごく少数の原子力の技術者・研究者のみになってしまったからかもしれないし、また再生可能エネルギーという分散的かつ不安定なエネルギー源の普及に期待をかける人々が、それに失敗し続けてきた過去の歴史を多く忘れがちである

からかも知れない)。

しかしハートウェル・ペーパーを読んだときに我々が感じる当惑は、彼らが決して単純な「経済派」の人々ではない、ということに起因するものであろう。即ち、彼らの主要な論点は「環境派の掲げる高い目標設定を経済合理性の観点から批判する」というような種類のものでは決してなく、むしろ「京都型の目標設定方式によっては到達し得ない高い目標を、それとは全く異なるアプローチによって達成する」ことにあるのである。その意味で、彼らは「環境派」と「経済派」との対立する地球環境問題の議論の中であって、その対立とは異なる地点において新しい解決を見出そうとする人々であるように見える。ではこの「全く異なるアプローチ」とは何なのか、ということが当然の疑問となる。

実は「時間と自己」の中には、アンテ・フェストゥムの(分裂病的)意識とポスト・フェストゥムの(鬱病的)意識との他に、これらとは根本的に異なる、第三の精神病理的意識が記述されている。それは「日常性の内部構造それ自体の解体によって姿を現す非日常性」と言われる癲癇者の意識、イントラ・フェストゥム(「祭りのさなか」)的な意識と呼ばれるものである。

癲癇における発作とは(私は身近にそういう人がいないためよく知らないのだが)突然患者の意識が失われ、患者は両眼を見開いて全身を硬直させ、その数秒から数十秒後には全身のリズミカルな屈曲進展の痙攣へと移行し、それが停止した後に数分間の昏睡状態や朦朧状態を経て深い睡眠に入るものだという。睡眠から覚めて後患者には発作時の記憶は残らないが、病型によっては意識消失の直前に患者自身が一瞬の間意識の強い変容を経験する場合があります、この異常体験は「アウラ」と呼ばれる、という。そしてこれがどのような体験であるかについては、木村敏が「時間と自己」の中で引用するように、本人自身が癲癇患者であった高名な小説家、ドストエフスキーの「白痴」の中の記述から知ることができる。

「・・・憂鬱と精神的暗黒と圧迫を破って、ふいに脳髓がぱっと焰を上げるように活動し、ありとあらゆる生の力が一時にもものすごい勢いで緊張する。・・・知恵と情緒は異常な光をもって照し出され、あらゆる憤激、あらゆる疑惑、あらゆる不安は諧調にみちた歓喜と希望のあふれる神聖な平穏境に、忽然と溶けこんでしまうかのように思われる。」

第一の意識(分裂病)と第二の意識(鬱病)がいわば水平方向での日常性の危機であるとするれば、第三の癲癇者の意識は垂直方向での日常性の危機である、と木村は言う。そしてそれは分裂病患者でも鬱病患者でも、或いは常時は健康な人であっても、何らかの事情によって意識が解体した場合には等しく経験し得るような普遍的な非理性である、のだという。そして木村にとってこの非理性的な体験は「永遠の現在」として、「愛の恍惚、死との直面、自然との一体感、宗教や芸術の世界における超越性の体験」といったものと同一視される。

即ちここでは、我々の個別的生命のもつ有限性に起因する「いままで」もしくは「いまから」といった分節が止揚され、「もの」性が排除された無時間の無際限な拡がりの中で宇宙大の自我が実感されているという「こと」としての、「純粋な現在」が現前するのだ、と言われる。そして例えばジャン・ジャック・ルソーが散歩中に夢想した、静かな自然との合一のごときもこの「純粋な現在」と本質的に同一のものである、と認識される。

木村の用いるこの「永遠の現在」という語が本人の言う通り西田哲学からの借用であることは間違いがない。しかしここで私は再び、これが西田哲学の誤読であるということを主張しなくてはならない。木村の言う祝祭的体験は、まさに癲癇の発作のように一瞬だけ神の恩寵のように与えられ、その体験をした後その人は急速に「日常」の生活に戻ってゆくものとされる。しかし西田自身のテキストを読めばわかるように、西田哲学における永遠の現在とは決して時間的に限られた状態にのみ体験されるものではない。そうではなくてそれは、私が生きる日々の時間が、常に、日常的にその「永遠の現在性」を有する、という種類のものではなくてはならない。同様に西田哲学にいう純粋経験という概念は決して「陶醉」や「恍惚」の瞬間などと関係するものではなく、単に私が食事をしているというだけの経験、また今ここで本を見ながらものを書いているというだけの経験が、そのまま直ちに純粋経験と呼ばれるのでなくてはならない。その日常的な純粋経験が実はあらゆる「非日常的」な体験、木村の語法に倣えば愛の恍惚や芸術的超越性といった体験の基礎になっているという止揚こそが、初期から晩年まで一貫する西田の思想の特徴である、ということをお我々は忘れてはならない。

木村が癲癇症に「現在性の優位」を見るのは（精神科医でない私にはわからないが）恐らく正しいのだろう。そしてそれが、「永遠の現在」と何らかの関係を持つものである、という主張も、もしかしたら正しいのかも知れない。しかしそれらは類似はしていても同一のものではなく、前者はあくまでも後者の模倣に過ぎない。宗教的な超越体験、或いは芸術的な経験といったものでさえも、それは精神異常者の心理と似てはいてもそれとは全く異なった何か、つまり非日常的な、ユートピア的な祝祭などではなく、逆に我々の日常性としての現在をどこまでも徹した方向に初めて見出される何かでなくてはならない。そしてそこにこそ、精神医学から哲学を論じるという立場の限界を見ることができるといえるだろう、と私は思う。

Hartwellites が考える従来とは全く異なるアプローチ、それにより京都型の目標設定では達成できないことを成し遂げることができるかも知れない、と夢想される方法とはどのようなものか、という疑問に戻ろう。彼らはアンテ・フェストゥムの意識とポスト・フェストゥムの意識との対立を離れた地点において、より別の次元から事態を解決する方法を模索する人々である、と私は述べた。ある問題が行き詰まったときに（彼らがまず最初に問題としたがるのは、コペンハーゲンの会議において京都議定書方式は完全な行き詰まりを見せた、ということである）それとは全く別の視野をもった地点から従来とは異なる解

決を求めようとするのは当然の姿勢であろう。しかしそこで彼らの提示する解決が、木村敏の考えるイントラ・フェストゥムの意識のような、「祝祭」としての華やかさを有していない、ということが、上記のような疑問を生じさせる原因であることに我々は気づかされる。実際彼らは彼らが対象とする問題に対して決して一義的な解決を提示するものではなく、そもそもそれを提示すること自体が可能であるとも考えていない。逆に彼らは環境論者、もしくは経済論者が提示する一義的な解決方法を否定し、我々の抱える問題に対する我々自身の無知や不確実性を認識することから始めるべきだ、と主張する。「温暖化対策は、科学が確実であるからではなく、まさに確実でないからこそ正当化される」という彼らの主張は、この意味において理解することができる。即ち確実な削減方法などというものが存在せず、従って環境対策の名のもとにさまざまな対策を一意的に配置し、遂行することができないからこそ、環境問題に対処する我々が経済問題や、エネルギー需給や、土地利用・都市化といった問題について個別に議論を行い、それぞれについて固有の問題の解決を目指すことが正当化されるのである。このような取組みの中では脱炭素化は明示的に意図された目標の達成によるものではなく、さまざまな分野での個別の解決の結果としてある意味「偶然」にもたらされるメリットとなる。我々は環境問題の解決のために他の何かを犠牲にするのではなく（それが不可能であることは既に過去の政治的経緯から明らかである、と Hartwellites は認識する）、その何か、例えば経済の成長や所得の格差といった問題自体の解決を、その内部で図ることにより、初めて間接的に環境問題への有効な対処を得ることができるのである。

それは一種、盲目的に道を歩むことであるようにも思われる。我々は将来への明確な、統一的な視野を得ることができない中で、常に現在与えられた個々の課題を解決することしかできない。「広範な賛同が得られ、最小のコストで早期に結果を出せるような対策から始めるべきである。」このような足もとの問題への固執が彼らの相貌を「経済派」に類似したものとさせるわけだが、既に述べたように彼らは決して単なる「経済派」ではない。彼らは常にそれを超えた解決を目指しているのであり、しかもその解決が永遠の（抽象的な）時間的視点に立った統一的な解ではなく、日常的な個々の問題を一つ一つ解いて行こうとするものである限りにおいて、彼らの姿勢はまさに上に述べた祝祭のない「現在」を生きようとするものである、とも言えるだろう。このような方法が果してどの程度有効に環境問題を解決し得るのかは、私にはわからない。むしろ私には、彼らの試みは結局環境問題への対処を拒否し、経済への配慮のために環境を犠牲にするだけに終る可能性を否定できないようにさえ感じられる。それをそのように終らせないために必要なものは、その「現在」をただの単純な「いま」から止揚するための何か、例えば見通すことのできない将来を尚も見通そうとする努力の持続であるのかも知れないし、或いはいまだ私の想像し得ない、今後更に地球温暖化問題が深刻化した場合に現れてくる予期せぬ課題への対処であるのかも知れない。

彼らがこのような状況をどの程度明確に認識しているのか、それも私にはわからない。

しかし彼らのその試みが成功するにせよ、失敗するにせよ、今後地球環境問題の政治的動向が複雑化する中で、結局はこのような「足もと」に立脚したあり方が長期的には大きな力をもつ、ということも十分に考えられる。そもそも人類の歴史上、このような複雑な、かつ高度に社会的な問題は、常に後ろ向きに、手探りでのみ実質的な進展がなされてきたものではなかったか。そのように考えるとき、彼らの主張する一見極めて反動的な立場も、地球環境問題に対処するための一つの試みとして注視を続ける価値は十分にあるように、私には思われる。

お問い合わせ：[report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)